
EO 動詞の下位分類について*

中村 典生

1. はじめに

人間の心理を表す心理動詞 (psychological verb) には 2 つのタイプがあることが知られている。ひとつは (1a) のように主語位置に経験者 (experiencer)¹ の項 (argument)² をとるタイプの心理動詞, もう一つは (1b) のように目的語の位置に経験者の項をとる心理動詞である。

- (1) a. Ken fears the ghost.
b. The ghost surprised Ken.

Pesetsky (1990) などにしたがって, (1a) の *fear* タイプの心理動詞を ES 動詞, (1b) の *surprise* タイプの心理動詞を EO 動詞と呼ぶことにする³。

EO 動詞には多くの特異性がある⁴。その中で, 主語の位置に照応形 (anaphor)⁵ が生じることができ, 逆行的束縛 (backward binding) という現象もその特異性のひとつである。照応形は, 通常, 構造上より高い位置に先行詞 (antecedent) をもたなければならない⁶。したがって, (2a) のように構造上高い主語位置にある要素は, 構造上低い目的語内の照応形の先行詞となることができるのであるが, 逆に (2b) のように目的語の位置にある要素は, 主語内の照応形の先行詞となることはできない。(* は非文 (= ungrammatical sentence) を表す。)

- (2) a. Tom and Mary_i fear each other_i.
b. *Each other_i's friends fear Tom and Mary_i.

生成文法 GB 理論⁷の枠組みでは, (2b) のように照応形と先行詞が適切な関係を結べないことを束縛原理 A (Binding Condition A)⁸違反と呼び排除する。

ところが EO 動詞を含む文に関しては, (3) のように, 構造上高い位置にある主語内の照応形が, 構造上低い位置にある目的語内の要素を先行詞にできるという特異性がある。

- (3) a. Each other_i's pictures amused John and Kate_i.
b. Friends of himself_i worried John_i.

これが逆行的束縛と呼ばれている現象である。

(2)-(3)で示した事実の説明法として、Grimshaw(1990)のように主題階層(thematic hierarchy)に言及する説明法がある。主題階層は、項が持つ意味上の役割(=主題役(thematic role))間に設定される階層のことで、上記のGrimshaw(1990)では次のような主題階層が仮定されている。

(4) 動作主>経験者>場所/起点/着点>主題

この主題階層を念頭に(2)-(3)を見てみると、適格な照応形と先行詞の関係には、ある法則があることがわかる。(2)では主語の位置に主題階層が高い経験者の項があり、目的語の位置に主題階層としては最も低い主題の項がある。(3)では主語の位置に主題の項があり、目的語の位置に経験者の項がある。

(5) a. [Tom and Mary_i [fear [each other_i]]] (= (2a))

b. [経験者 [動詞 [主題]]]

(6) a. [Each other_i's pictures [amused [John and Kate_i]]]

b. [主題 [動詞 [経験者]]] (= (3a))

(5)-(6)から、Grimshaw は、主題階層上より高い項(ここでは経験者)は、主題階層上低い項(ここでは主題)内の要素の先行詞となるという結論を導いた。

しかし問題はそんなに簡単ではないことがわかってきている。(7)は固有名詞などの指示表現(R-expression)を含む例である。指示表現は先行詞をもってはならない。

(7) a. *He_i likes John_j.

b. He_i likes John_j.

生成文法 GB 理論の枠組みでは、(7a)のように指示表現(ここでは *John*)が先行詞(ここでは *He*)を持つことを束縛原理C (Binding Condition C)⁹違反と呼び排除する。

もし仮に、Grimshaw が言うように、主題階層的に高い項が、主題階層上低い項内の要素の先行詞となるという法則が成り立つと考えると、次のEO 動詞を含む文(8)は問題となる。というのは、主題階層上高い経験者の項である目的語の *him* が、主題階層上低い主題の項である主語内の指示表現 *John* の先行詞となるので、束縛原理Cに抵触し非文となることが予想されるからである。しかしこの予想に反して、(8a)は完全に適格な文である。

(8) a. [John_i's mother [surprised [him_i]]]

b. [主題 [動詞 [経験者]]]

もし、Grimshaw の説明を固持しようとする、EO 動詞を含む文では、主語内の要素が照応形の場合は、目的語が先行詞となることができ、主語内の要素が指示表現の場合は、目的語が先行詞になってはならないという、非常に場当たりのな但し書きをつけなければならなくなる。これでは説明として好ましくない。

以上述べたように、EO 動詞を含む文について考える際、目的語から主語への関係が必須な(9a)のような文と、目的語から主語への関係があってはならない(9b)のような文を同時に説明できなければならないことになる。

- (9) a. Pictures of himself_i excited John_i.
 b. John_i's picture excited him_i.

中村(1996)では、(9a, b)は、EO 動詞を含む文に見られる主語・目的語間の結びつきの随意性の問題(以下、束縛の随意性の問題)であると捉えられている。したがって、EO 動詞を含む(9)を説明するに当たり、目的語から主語への結びつきが義務的であると考えられる Grimshaw(1990)的な説明法は破綻を来すことになる。

(9)の EO 動詞を含む文に見られる束縛の随意性の問題に説明を試みたものとして、非対格仮説(unaccusative hypothesis)を提唱し、束縛原理 A・C がかかるレベルを分けることによって説明を試みた Belletti & Rizzi (1988)¹⁰や、随意的な経験者繰り上げ仮説(Experiencer Raising Hypothesis)をたてることによって説明を試みた Nakamura(1994)(1996)¹¹などがある。ところが最近になって、まったく違うアプローチから束縛の随意性を説明しようとする試みが、Stroik(1996)においてみられた。Stroik によれば、EO 動詞は2種類に下位分類でき、逆行的束縛を許す(9a)のような文を構成するEO動詞と、(9b)の EO 動詞はそもそも違う性質を有するものなので、別々に説明されるべきであるというのである。Stroik の考えが正しいとすると、(9a)と(9b)を同時に説明しようとする際に起こった束縛の随意性の問題は解消されることになる。

そこで本稿では、2つの目標を掲げることとする。ひとつは EO 動詞が2種類あるという Stroik(1996)の議論を検証し、その真偽を確かめることであり、もうひとつは、Stroik の議論の是非をふまえて、新たな逆行的束縛の説明法を考案することである。

2. Stroik (1996)

Stroik(1996)は、EO 動詞は状態動詞(stative verb)として使われる場合と、非状態動詞(non-stative verb)として使われる場合があると述べた。そして、逆行的束縛など、特異な統語現象が生じる(10a)(= (9a))のような文の場合は、状態動詞として使われている EO 動詞であり、一方、特異な統語現象を含まない(10b)(= (9b))のような文の場合は、非状態動詞として使われている EO 動詞であると述べた。

(10) a. Pictures of himself_i excited John_i. (*excited* は状態動詞)

b. John_i's picture excited him_i. (*excited* は非状態動詞)

さらに Stroik は, Dowty(1979)や Roberts(1987)の議論から, 非状態動詞としての EO 動詞を含む文においては, 派生の段階で目的語の経験者の項((10b)では *him*)が主語をC統御できる, 主語よりも高い位置に来ることはなく, 一方, 状態動詞としての EO 動詞の場合は, 派生の段階で経験者の項((10a)では *John*)が主語をC統御できる, 主語よりも高い位置にくると述べている。したがって, (10a)では派生の段階で束縛原理Aがみたされ, (10b)では束縛原理Cに抵触しないことになる。このように, EO 動詞は2種類に下位分類できると考え, それぞれの異なった構造を仮定すると, (10a)(10b)を同時に説明しようとする際に生じた, 束縛の随意性の問題は解消されることになる。

Stroik(1996: 154)では, (10a)のように逆行的束縛現象を含む EO 動詞は状態動詞であり, (10b)の EO 動詞が非状態動詞であるという証拠として, (11)–(13)のような例文があげられている。(11)から(13)はいずれも動詞の非状態性に関するテストであるが, それぞれの(a)と(b)が異なった文法性を示すことに注意されたい。

(11) a. *Pictures of herself_i are annoying her_i.

b. Mary_i's job is annoying her_i.

(12) a. *What pictures of herself_i do is annoy her_i.

b. What Mary_i's job does is annoy her_i.

(13) a. *Pictures of herself_i generally annoy her_i every day at noon.

b. Mary_i's job generally annoys her_i every day at noon.

(11)は進行形にできるかどうかによる動詞の非状態性のテストである。進行形にできるのは非状態動詞だけであるが, 逆行的束縛がおこる(10a)では(11a)のように進行形にすると非文となる。(12)は疑似分裂文(Pseudo-cleft sentence)にできるかどうかによる非状態性のテストである。疑似分裂文にできるのは非状態動詞だけであるが, (10a)は(12a)のように疑似分裂文にすると非文になる。(13)は動詞が反復単純現在(iterative simple present)で使えるか否かによる非状態性のテストである。反復単純現在形になり得るのは非状態動詞だけであるが, (10a)は反復単純現在形にすると(13a)のように非文となる。以上のように, 非状態性のテストでは, 逆行的束縛を含む文はいずれも非文となることから, Stroik は, 逆行的束縛などの特異な統語現象が起こる場合の EO 動詞は状態動詞であるという結論を下したわけである。以下では, この Stroik の議論について検証する。

3. Stroik (1996)の問題点について

EO 動詞は状態動詞として使われる場合と、非状態動詞として使われる場合があり、逆行的束縛がおこる場合は必ず状態動詞としての EO 動詞であるという Stroik (1996) の議論は、束縛の随意性の問題をうまく説明できるので、一見完璧な議論のように見える。しかし、Stroik の行った非状態性のテストは本当に的確なテストだったのかという疑問が残る。というのは、たとえば、Stroik は非状態動詞のみが進行形になると述べ、これを非状態性のテストとして用いていたが、状態動詞の *love*, *believe* など、条件がそろえば (14) のように進行形になり得る。

- (14) a. The French doll she was loving wore an exquisite powdered wig.
 b. She had believed him. More than that, she was believing things he had not told her.
 (大江 (1982: 80))

このような事実から、逆行的束縛が起こる際、EO 動詞は状態動詞であるということを証明するために、前章で Stroik が課したテストは、証拠としてはかなり弱いことがわかる。再度、Stroik の議論の信憑性を確かめてみる必要がありそうである。

前章 (11)-(13) で Stroik がテストしたのは動詞の非状態性についてだけであった。そこで本節では、動詞の状態性についてのテストを行ってみることにする。EO 動詞には状態動詞と非状態動詞の 2 種類があるということを認めるのであれば、当然、非状態性のテストに加えて、状態性のテストも行うことが望ましいはずである。

動詞の状態性のテストとして、(i) 単純現在時制で使えるかどうか、(ii) *appear to* や *seem to* と共起できるかどうか、(iii) *believe* などの例外的格表示 (Exceptional Case Marking, 以下 ECM)¹² を許す動詞の不定詞補文に埋め込めるかどうか、という 3 つのテストが考えられる。実例を挙げると、(15) のように、非状態動詞 (ここでは *hit*, *kick*) は、(16) の状態動詞 (ここでは *know*, *remember*) と異なり、単純現在時制をとることができない。

- (15) a. *Ken hits Mary now.
 b. *Nancy kicks Bill now.
 (16) a. Ken knows Mary now.
 b. Nancy remembers Bill now.

また、状態動詞以外は *appear to* と共起できない¹³。

- (17) a. *Ken appears to hit Mary.
 b. *Nancy appears to kick Bill.
 (18) a. Ken appears to know Mary.

- b. Nancy appears to remember Bill.

さらに、ECM 構文の不定詞補文に埋め込めるのは状態動詞のみである。

- (19) a. *I believe Ken to hit Mary.

- b. *I believe Nancy to kick Bill.

- (20) a. I believe Ken to know Mary.

- b. I believe Nancy to remember Bill.

この動詞の状態性に関する3つのテストを、前章で Stroik が提示した例文(21)について適用してみる。Stroik の議論では、(21a)が状態動詞であり、(21b)が非状態動詞であるので、状態性に関するテストを適用すると、(21b)のみが非文となることが予測される。しかしこの予測に反して、逆行的束縛を含む文(21a)も、そうではない文(21b)も、状態性のテストをクリアし、(22)-(24)のようにいずれも完全に適格な文となることがわかる。

- (21) a. Pictures of herself_i annoyed her_i.

- b. Mary_i's job annoyed her_i.

- (22) a. Pictures of herself_i annoy her_i now.

- b. Mary_i's job annoys her_i now.

- (23) a. Pictures of herself_i appear to annoy her_i.

- b. Mary_i's job appears to annoy her_i.

- (24) a. I believe pictures of herself_i to annoy her_i.

- b. I believe Mary_i's job to annoy her_i.

(22)-(24)がすべて適格な文となることから、Stroik が状態動詞と非状態動詞であるとして区別した(21a)と(21b)は、いずれも同じ状態動詞であるという結果が出たことになる。上記の3つのテストは、動詞の状態性を確かめる非常に信頼度の高いテストであるので、(21)の2つの文がいずれも状態動詞を含む文であるということは間違いない。

この事実は Stroik の議論の決定的な問題となる。Stroik の説明では、(21b)は非状態動詞であるゆえ、派生の段階で *her* が *Mary* よりも高い位置に来ることはなく、束縛原理Cに抵触しないという説明だったからである。しかし(21b)が状態動詞であれば、派生の段階で *her* が *Mary* よりも高い位置に来るので、束縛原理Cに抵触し非文となるという間違った予測をしてしまうことになる。

それではいったい、Stroik が提示した非状態性のテスト(11)-(13)において、逆行的束縛を含む文とそうではない文で、文法性の差が出たという事実はどう捉えればいいのかであろうか。Stroik はいったい何を取り違えてしまったのかを明らかにする必要がある。そこで、再度 Stroik が提示した動詞の非状態性に関する例文の文法性を、綿密にチェックをし直してみた。その結果が(25)-(27)

である。

- (25) a. ??Pictures of herself_i are annoying her_i.
 b. ?Mary_i's job is annoying her_i. (cf: (11))
- (26) a. ??What pictures of herself_i do is annoy her_i.
 b. ?What Mary_i's job does is annoy her_i. (cf: (12))
- (27) a. ?Pictures of herself_i generally annoy Mary_i every day at noon.
 b. ?Mary_i's job generally annoys her_i every day at noon. (cf: (13))

以上のように、Stroik が非文であるとした(25a) (26a) (27a)とも完全な非文とはならず、一方、完全に適格な文となるとした(25b) (26b) (27b)には多少の逸脱性が確認された。

(25)-(26)について考えてみる¹⁴。確かに、Stroik が言うように、(25a) (26a)と(25b) (26b)の間に(わずかではあるが)文法性の差が見られた。しかしこの差は非常に微妙であり、むしろ Stroik が完全に文法的であるとした(25b) (26b)にも、多少の逸脱性が見られたことに注目すべきであろう。もし、Stroik が言うように、(25a) (26a)と(25b) (26b)の文法的な差が、束縛原理という非常に強い制約に違反するか否かによる差であるのであれば、もっとはっきりした差が出るはずである。ところが、これらの文のいずれにも弱い逸脱性がみられるということは、この文法性の差に束縛原理がかかわっておらず、もっと何か他の要因がかかわっているのではないかと考えることができる。

その要因として考えられるのは、主語名詞句の解釈の問題である。(25a) (26a)には *pictures* という名詞が、(25b) (26b)には *job* という名詞が使われているが、これに着目してみる。興味深いことに、文法性が高い(25b) (26b)の主語内の名詞 *job* を *pictures* にかえてみると文法性が下がり、(25a) (26a)と同じ逸脱性(?マーク 2 つ)になることがわかる¹⁵。

- (28) a. ?Mary_i's job is annoying her_i.
 b. ??Mary_i's pictures are annoying her_i.
- (29) a. ?What Mary_i's job does is annoy her_i.
 b. ??What Mary_i's pictures do is annoy her_i.

また、照応形や代名詞類を含まず、まったく束縛の問題とかわりのない次のような例についても、主語に *pictures* を使うか、*job* を使うかで微妙な文法性の差が生じる。

- (30) a. ??Pictures are annoying Mary.
 b. ?The job is annoying Mary.

(28)-(30)より、(25a) (26a)と(25b) (26b)の文法性の違いは、Stroik が言うような束縛原理に違反するか否かという強い制約に帰因するのではなく、主語名詞句に何を選択するかに帰因するもので

あることがわかる。

それではいったい、*picture* と *job* の違いとは何であるのかということが残された問題となる。はっきりとした答えは出せないが、ひとつの手がかりとして次の例が考えられる。

- (31) a. John is intentionally annoying Mary.
b. What John does is annoy Mary (on purpose).

(31)の *John* は意図的に *Mary* を不愉快にさせようとしている。このように、心理動詞を使い、主語が意図的に何かをしようとする解釈ができる場合、進行形も疑似分裂文も完全に文法的となる。つまり、主語に意図性があるかないかで、文法性に差が出てくるのである^{16,17}。

job と *picture* を比べてみると、*job* の内容の中には、人間関係、仕事の内容等様々な複雑な要素が含まれている。一方、*picture* は単なる「もの」としての印象が *job* よりも強い。言うなれば、*job* の方が意志を持つ主体として擬人化しやすいのではないかと思われる¹⁸。*job* と同様の文法性を示すものとして次のような例がある。

- (32) a. ?Tokyo is annoying Mary.
b. ?What Tokyo does is annoy Mary.
(33) a. ?My hometown is bothering me.
b. ?What my hometown does is bother me. (cf: (28a), (29a))

Tokyo や *my hometown* の意味内容にも *job* 同様、多くの要素が絡み合っていると思われる。したがって、*Tokyo* も *my hometown* も、*job* 同様、意志を持つ主体として擬人化されやすいと思われる。(32)の *Tokyo* を *Pictures of Tokyo* に変えると、文法性が下がる。

- (34) a. ??Pictures of Tokyo are annoying Mary.
b. ??What Pictures of Tokyo do is annoy Mary.

このように、主語名詞句の意味上の問題が、文の文法性に関係してくると考えられ、この差が、Stroik が束縛の問題であるとは取り違える原因になったと考えられる。

以上、Stroik は EO 動詞が状態動詞と非状態動詞に下位分類できると述べたが、これが間違った議論であることを証明し、その間違いが生じる原因となったデータについて吟味することによって、問題点を指摘した。次章では、残された問題点について論じる。

4. 残された問題点について

前章で、EO 動詞は状態動詞と非状態動詞には下位分類できず、逆行的束縛が起こる場合も、そ

うでない場合も、いずれも状態動詞であるという結論に至った。これにより、再び束縛の随意性の問題が浮上してくることになる。つまり、束縛原理 A・C にかかわる、(35a, b) の例文を同時に説明しなければならないことになるわけである。

- (35) a. Pictures of himself_i bothered Ken_i.
 b. Ken_i's picture bothered him_i.

繰り返すことになるが、(35a)については *Ken* が *himself* の先行詞にならない（束縛原理 A）。つまり、目的語から主語への結び付きが必須となる。一方、(35b)については *him* が *Ken* の先行詞となってはならない（束縛原理 C）。つまり、目的語から主語への結び付きがあってはならないのである。

(35)を説明するに当たり、破綻したとはいえ、Stroik のアプローチは非常に参考になる部分もある。Stroik は(35a)と(35b)中の動詞 *bother* がそもそも異なった性質を持ち、それゆえ(35a)と(35b)が構造的にも違うと述べた。この議論は構造に言及して束縛の随意性の問題を説明する非常に強い議論である。

もし、Stroik 的なアプローチで束縛の随意性の問題について議論することを目指すのであれば、(35a)と(35b)の間に、動詞の性質の差を見だし、その差を構造に還元すればいいことになる。本稿での議論で、(35a, b)の EO 動詞はいずれも状態動詞であることが証明されたので、状態動詞の下位分類ができればその足がかりとなる。

そのひとつの可能性として、Carlson(1977)が示した状態述語の2分法がある。Carlson は状態述語を次のように individual level predicate と stage level predicate（これらの述語については日本語訳が確定していないので、以降英語のまま使用する）に分けた。

- (36) a. Tom is tall. (individual level)
 b. Tom is happy. (stage level)

平たく言えば、individual level predicate は「背が高い」などの恒久的な性質を表すものであり、stage level predicate は「嬉しい」などの一時的な性質を表すものである。さらに、この議論を受け、Diesing(1992)は、individual level predicate と stage level predicate を含む文には、構造の差があることを述べている。

もし、状態動詞である EO 動詞が、逆行的束縛を含む場合と、そうではない場合で individual level と stage level に下位分類できるなら、上述の Diesing の議論を採り入れ、束縛の随意性の問題を構造の見地から説明できる可能性がある¹⁹。しかし、この方法でうまく行くかどうかについては、もう少しデータを集め、それを綿密に検討してみる必要がある。この件については今後の研究課題としたい。

5. 結語

Stroik(1996)は、EO 動詞を状態動詞と非状態動詞に下位分類し、それぞれに異なった構造をたてることによって、EO 動詞の束縛の随意性を説明するという新しい試みを行った。しかし、彼が非状態動詞であると述べたデータは綿密に吟味してみると状態動詞であり、また、彼の議論のもととなった束縛に関するデータは、全く束縛には関係しないデータであることが証明された。これらの証拠から、Stroik の議論では、束縛の随意性の問題を説明できないことを述べた。

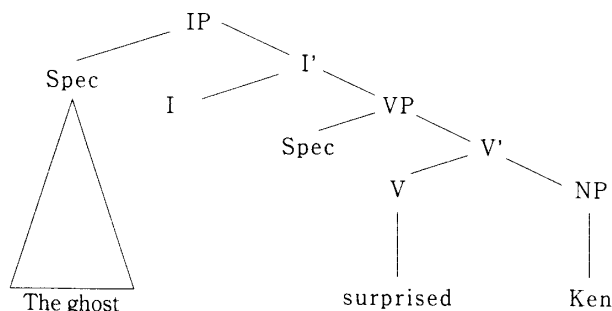
しかし、EO 動詞を下位分類し、それを構造に還元することによって束縛の随意性を説明しようとした方法は評価に値する。前章で述べた Carlson, Diesing などの議論を参考にして、今後は状態動詞である EO 動詞を下位分類し、それを構造に還元して束縛の随意性を説明できるかどうか、さらに広範かつ細かなデータを収集、検討し、引き続き研究を進めていくことにしたい。

(なかむら・のりお 産業情報学科)

注

*本稿執筆にあたり、貴重なコメントを賜るとともに、快くデータチェックの労を引き受けていただいた、筑波大学現代語現代文化学系講師の Roger A. Martin 氏に深く感謝の意を表する。

1. 主題関係(thematic relation)を表す概念のひとつで、この他に動作主(agent)、起点(source)、着点(goal)、道具(instrument)、主題(theme)などがある。詳しくは Jackendoff(1972), Radford(1982), Grimshaw (1990)などを参照のこと。
2. 動詞などが選択する主題役(thematic role)を担う名詞句等を指す。
3. ES 動詞の ES は Experiencer Subject の意味であり、EO 動詞の EO は Experiencer Object の意味である。
4. 本稿で扱う逆行的束縛以外の EO 動詞を含む文の特異性としては、主語内寄生空所(subject-internal parasitic gap)を許すことや、弱交差効果(weak crossover effect)が見られないことなどがある。詳しくは、Reinhart(1983), Johnson(1985), Nakamura(1993)(1994), Stroik(1996)などを参照のこと。
5. 照応形は固有の指示を欠き、義務的に先行詞を必要とする名詞類のことで、再帰代名詞、相互代名詞、NP 痕跡などがこれに含まれる。
6. 生成文法理論の大前提は、言語には構造があるということである。例えば、GB 理論の枠組みでは、(1b) *The ghost surprised Ken.* は次のような表層構造を持つと考えられる。



構造上、主語が目的語よりも高い位置にあることに注意されたい。

7. Chomsky(1981)(1982)の理念に基づく、原理とパラメータのアプローチ(principles and parameters approach)をとる理論。詳しくは上述の Chomsky の著作、中村・金子・菊池(1989)、原口・中村(1992)などを参照のこと。
8. 束縛原理 A の定義： 照応形はその統率範疇(governing category)の内部で束縛されていなければならない。

なお、束縛原理 A に関する詳しい説明については、Chomsky(1981)、中村・原口(1992)、中村(1996)などを参照。

9. 束縛原理 C の定義： 指示表現は自由でなければならない。

なお、束縛原理 C に関する詳しい説明については、Chomsky(1981)、中村・原口(1992)などを参照。

10. Belletti & Rizzi (1988)は、EO 動詞を含む文の基底構造は、主語位置が空(null)である (i)(=9a)のような構造であり、その後、動詞と姉妹関係にある主題の名詞句が移動して、表層での主語をみたすと述べた。

- (i) $[_{IP} \uparrow [_{VP} [_{V'} \text{excited } [_{\text{Pictures of himself}}]]] \text{John}_i]]$
-

(i)の基底構造においては、経験者の項 *John* が、主題の項である *Pictures of himself* より上位にあるので、基底で束縛原理 A をみたすことができる。一方、束縛原理 C は、S 構造のみでかかる原理であるという仮定がなされている。したがって(ii)(=9b)においては基底で指示表現 *John* を含む主題の項を経験者の項である *him* が C 統御してしまうが、この基底レベルでは束縛原理 C がかからず、束縛原理 C がかかる S 構造では、指示表現 *John* は *him* よりも構造上高い主語位置に移動しているので、なんら問題がないという説明である。

- (ii) $[_{IP} \uparrow [_{VP} [_{V'} \text{excited } [_{\text{John}_i\text{'s pictures}}]]] \text{him}_i]]$
-

このように、Belletti & Rizzi(1988)は、束縛原理 A・C がかかるレベルを分けることによって、EO 動詞を含む文の束縛の随意性の問題について説明を試みたわけである。

しかし、この分析にはいくつかの問題点があることが指摘されている。本稿の主旨から離れるのでこれ以上の言及は避けるが、Belletti & Rizzi の問題点についての詳しい議論は、Stowell(1987)、Campbell & Martin(1989)、Pesetsky(1990)、Hashimoto(1991)、Nakamura(1993)(1994)などを参照のこと。

11. Nakamura(1994)(1996)は、EO 動詞は非対格動詞であるという Belletti & Rizzi(1988)の仮説を退け、論理形式(LF)で目的語である経験者の項が、随意的に主語よりも高い位置に付加(adjoin)され、束縛原理をみたすという、経験者繰り上げ仮説を仮定することによって EO 動詞を含む文の束縛の随意性を説明しようとした。(i)のように、経験者の項が付加される位置は IP であり、その位置から主語内の照応形を C 統御し、束縛原理 A をみたすとされている。

- (i) [_{IP} [_{IP} Pictures of himself_i [_{VP} excited John_i]]] (= (9a))

(cf: 中村(1996: 126))

経験者繰り上げは随意的なので, (ii)では *him* が繰り上がらないというオプションをとれば
いいと説明できる。

- (ii) [_{IP} [_{IP} John_i's pictures [_{VP} excited him_i]]] (= (9a))

経験者の項が繰り上がってもあがらなくてもいずれにしても束縛原理に抵触するときのみ,
(iii)のように非文となる。

- (iii) *That each other_i's friend met John and Mary_i surprised them_i.

つまり, (iii)において, 経験者繰り上げが起こらず *them* が目的語の位置に留まるオプション
をとると, *them* は *each other* をC統御できず, 束縛原理Aに抵触する。また, 経験者繰り上げ
が起こるというオプションをとると, *them* が *each other* を束縛でき, 原理Aはみたせるが, 同
時に指示表現*John and Mary* までもC統御してしまうので, 束縛原理Cに抵触してしまうわけ
である。

経験者繰り上げ仮説の詳しい議論については, 中村(1993)(1994)(1996)を参照のこと。

12. 動詞 *believe* は *try* などと違い, (ia)のように動詞+NP+to 不定詞という形をとることができ
る。

- (i)a. John believed [Bill to be sad] .

- b. *John tried [Bill to leave] .

(ia)と(ib)が異なった文法性を示すことから, これらは異なった構造を持つと考えられており,
believe タイプの動詞のみ姉妹関係にない補文内の *Bill* に格付与(Case assignment)することがで
るので, (ia)が適格な文になると説明される。(ia)の現象は, *believe*, *guess*, *suppose*, *think* など
のごく限られた動詞だけにみられるものであり, また, ドイツ語, フランス語などの言語には
みられないことから, 例外的格表示と呼ばれている。

13. 筑波大学の Roger, A. Martin 氏は, *appear to*(*seem to*)が現在時制の時のみ, 状態性のテスト
として有効であることを指摘している。

14. (27)に関して, (27a)(27b)がいずれも同じような逸脱性(?マークひとつ)を示したことは, こ
れらが同様に状態動詞を含む文であるからであると説明できる。

15. (28b)(29b)の文法性が下がるのは, 主語名詞句内の *pictures* が複数形であるという理由ではな
い。このことは, 単数形 *picture* を用いても文法性が変わらない以下の文から明らかである。

- (i)a. ??Mary_i's picture is annoying her_i.

- b. ??What Mary_i's picture does is annoy her_i.

16. (31)のような解釈の際, *John* は主題役としては動作主であり, 目的語の *Mary* は主題であると
解釈される。また, 本稿でこれまで述べてきたように, *annoy* のような心理動詞は主語に主題,
目的語に経験者の項をとることもできる。このように, *annoy* などの心理動詞は次の2通りの
項構造を持つことができることがわかる。

(i)a. [IP動作主 [VP V 主題]]

b. [IP主題 [VP V 経験者]]

(ia)のような項構造をとるとき、*annoy* の類の心理動詞は状態動詞ではなく動作動詞(action verb)であると解釈され、他の一般的な動作動詞同様、進行形、疑似分裂文を許すのであるが、(ib)の項構造をとるとき、動詞は状態動詞である EO 動詞であると解釈されるので、進行形にすると多少の逸脱性が生じると説明できる。

EO 動詞の項構造についての議論は、Grimshaw(1990), Nakamura(1993)を、また動詞の分類については、Vendler(1967), 中右(1994)などを参照のこと。

17. (ia)のように、[IP 動作主 [VP V 主題]] のような項構造をとる動作動詞としての心理動詞には、(ib)に見られるような逆行的束縛などの特異な統語現象は見られない。

(i)a. *Friends of himself_i intentionally bothered Ken_j.

b. Friends of himself_i unintentionally bothered Ken_j.

18. 意味の問題には個人差がある。もし発話者が画家で、*picture* が擬人化しやすいと捉えられている場合には、*picture* を用いても文法性がかわらないことも考えられる。

19. 中村(1996)では、EO 動詞の束縛の随意性を説明する一つの方法として、経験者の項が内在格(inherent Case)を持つ可能性が示唆されている。本稿で論じている、逆行的束縛現象が見られる場合とそうでない場合で異なった構造をたてるという議論に、格を含めた formal feature の checking に関する中村(1996)の議論を取り込むことができれば、さらに強力な議論になり得ると思われる。

参考文献

1. Barss, A. (1986), *Chains and Anaphoric Dependence, On Reconstruction and Its Implication*. Doctoral Dissertation, MIT.
2. Belletti, A. & L. Rizzi (1988), "Psych-verbs and θ -theory," *NLLT* 6, 291-352.
3. Campbell, R. & J. Martin (1989), "Sensation Predicates and the Syntax of Stativity," *WCCFL* 8, 44-55.
4. Carlson, G. (1977), *Reference to Kinds in English*. Doctoral Dissertation, University of Massachusetts.
5. Chomsky, N. (1981), *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris. 安井 稔・原口庄輔(訳)(1986),『統率・束縛理論』東京：研究社.
6. Chomsky, N. (1982), *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*. Cambridge, Mass.: MIT Press. 安井 稔・原口庄輔(訳)(1987),『統率・束縛理論の意義と展開』東京：研究社.
7. Chomsky, N. (1986a), *Knowledge of Language: Its Nature and Origin and Use*. New York: Praeger.
8. Chomsky, N. (1986b), *Barriers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

9. Chomsky, N. (1993), "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20*, eds. K. Hale and S. J. Keyser, 1-52, Cambridge, Mass.: MIT Press. 外池滋生・大石正幸(監訳),『ミニマリスト・プログラム』東京: 翔泳社.
10. Chomsky, N. (1994), "Bare Phrase Structure," *MIT Occasional Papers in Linguistics* 5, Department of Linguistics and Philosophy, MIT, Cambridge, Mass.
11. Diesing, M. (1992), *Indefinites*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
12. Dowty, D. (1979), "Dative "Movement" and Thompson's," *Extensions of Montague Grammar*," in S. Davis & M. Mithun (eds.), *Linguistics, Philosophy, and Montague Grammar*, 153-222, Austin: University of Texas Press.
13. Grimshaw, J. (1990), *Argument Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
14. Fujita, Y. (1993), "Object Movement and Binding at LF," *Linguistic Inquiry* 24, 381-388.
15. 原口庄輔 & 中村 捷 (1992),『チョムスキー理論辞典』東京: 研究社.
16. Hashimoto, M. (1991), "On the "Unaccusativity" of Psychological Verbs," *Tsukuba English Studies* 10, 239-251.
17. Jackendoff, R. (1972), *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
18. Johnson, K. (1985), *A Case for Movement*. Doctoral Dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
19. Lasnik, H. & M. Saito (1992), *Move - α* . Cambridge, Mass.: MIT Press.
20. 中右 実 (1994),『認知意味論の原理』東京: 大修館.
21. 中村 捷・金子義明・菊池 朗 (1989)『生成文法の基礎』東京: 研究社.
22. Nakamura, N. (1993), "On Psych-Verbs in English," unpublished M. A. Thesis, University of Tsukuba.
23. Nakamura, N. (1994), "Psych-Verbs and the Experiencer Raising Hypothesis," *Proceedings of the 7th Summer Conference 1993*, Tokyo Linguistics Forum, 87-106.
24. 中村典生 (1996),「逆行的束縛再考」『つくば国際大学研究紀要』vol. 3, 191-208.
25. 大江三郎 (1982),『動詞 (I)』講座・学校英文法の基礎 4, 東京: 研究社.
26. Pesetsky, D. (1990), "Experiencer Predicates and Universal Alignment Principles," ms., MIT.
27. Reinhart, T. (1983), *Anaphora and Semantic Interpretation*. London & Canberra: Croom Helm.
28. Roberts, I. (1987), *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*. Dordrecht: Foris.
29. Saito, M. (1992), "Long Distance Scrambling in Japanese," *East Asian Linguistics* 1, 69-118.
30. Stowell, T. (1987), "Arguments, Adjuncts, And Crossover," ms., UCLA.
31. Stowell, T. (1990), "Binominal *Each*," paper presented at Meiji Gakuin University.
32. Stroik, T. (1996), *Minimalism, Scope, and VP Structure*. California: SAGE Publications.
33. Vendler, Z. (1967), *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, N. Y.: Cornell University Press.

On the Sub-Classification of EO Verbs

Norio Nakamura

Stroik (1996) tries to explain optional binding phenomena in sentences involving EO verbs by classifying EO verbs into two sub-classes, that is, stative and non-stative. The main purpose of this paper is to examine his analysis.

This paper is organized as follows:

First of all, a brief review of previous studies is given in order to make the crucial problem clear.

Secondly, I show Stroik's argument is unsound. More specifically, the following flaws are pointed out;

(1) EO verbs are always stative and cannot be used as non-stative.

(2) The sentences he cited in the article are not qualified as the examples including Binding phenomena.

Lastly, I show some problems unsettled and propose a plausible solution to them.

Key Words: Generative Grammar, Psychological Verb, Binding Condition, Backward Binding